

書 評

伊藤清司著

『昔話伝説の系譜』
— 東アジアの比較説話学 —

繁原 央[※]

1. 本書の構成

昔話や伝説の論文は引用される話そのものに魅かれてしまっていて、つい著者の意図を見過ごしてしまうことがあるが、伊藤清司氏のこれまでの昔話伝説関係の著書に対してもそうした読み方をしたことがある。なぜなら、そこには日中朝に渡る膨大な話に、文献資料まで目配りよく提供されているのが常だからで、地図とつきあわせながら、話の分布を確認するという楽しみ方もできた。ただ伊藤氏の著作は鮮明な問題意識の下にわかりやすく論を展開されるので、その意図もはっきり伝わってくる。本書も近年の氏の業績をまとめたもので、こうして一本にされたことにより、氏の視点がより明確になり、比較説話学に心をよせる者にとって、現在の到達点と今後の方向を示された思いがする。

「もくじ」の章立ては、

序にかえて

第Ⅰ章 農耕文化と民間説話

- I 雲貴高原の民間伝承
- II 大歳の客—その系譜—
- III 大歳の客型伝説とツォタイジ儀礼
- IV 伝説と神話—嫁殺し田の場合—
- V 西南中国の火把節起源伝説
— 斎藤実盛虫送り —

第Ⅱ章 金属文化と民間説話

- I 炭焼長者の構造と系譜
- II 温羅伝説
- III 日朝芋掘長者の比較

第Ⅲ章 外来説話の諸相

- I カチカチ山の比較

※常葉学園短期大学助教授

II 桃太郎の故郷

III 継子の井戸掘り

結び

からなり、この11の各論文を初出一覧で見ると、第Ⅰ章の5論文はいずれも1985年から1989年までの最新の論考である。氏の近年の研究対象が農耕文化と説話との関連にあったことが伺える。第Ⅱ章の3論文は1979年から1983年にかけて書かれ、農耕文化の前に炭焼長者譚と金属文化を追求されていたとわかる。第3章の3論文は1984年から1991年まで、ⅠⅡ章と並行して書かれており、農耕文化とも金属文化とも言えない説話を収めたものであろう。

これら11の章段は相互に密接な関連をもつ。そこで扱われる昔話・伝説の話型は、「花咲爺」「大歳の客」「嫁殺し田」「斎藤実盛虫送り」「炭焼長者」「カチカチ山」「桃太郎」「継子の井戸掘り」の8話を主たる素材とされている。氏はこれらの説話が比較説話学の視点からみると、柳田国男以来の民俗学的アプローチで解ったような気であったことが、別の解釈をせざるをえなくなってくると論じている。

2. 『中国民話の旅から』より

1985年2月に氏が刊行された『中国民話の旅から—雲貴高原の稲作伝承—』(NHKブックス)は、私にとってなつかしい書物である。この本は氏が1982年から翌年にかけて中国滞在中に、西南中国などに調査旅行された旅行記の体裁をとっている。実は私も1982年と84年に「中国民話の会」訪中団につれられて、氏が行かれた同じような所を訪問しており、なつかしさとおもしろさで夢中で読んだ覚えがあるが、この本で興味深く展開されていた話題が本書でより精確に論文化されている。

『民話の旅から』は、

第1章 歳末の花溪から

—「大歳の客」型説話との出会い—

第2章 田植え時の棚田に立って

—「嫁殺し田」型説話の背景—

第3章 松明祭りの雲貴高原をゆく

—虫送り習俗との関連

第4章 新嘗祭の村々を訪ねて

—穀物将来説話と「花咲爺」の原像

終章 雲貴高原に生きる人びと

—西南中国の少数民族と日本の基層文化

の5章からなるが、章題からもわかるように、1～4章が本書の「第I章農耕文化と民間説話」のII・IV・V・Iの各論文に発展していったわけで、「III大歳の客型伝説とツォタイジ儀礼」だけが、その後の調査に基づく。

今両書を比べてみると、『民話の旅から』は紀行文風な所があり、これらの各話型にばかり触れているわけではなく、その他興味深い民俗事象の紹介もされている。それに対して、本書では論文らしく各話型をさらに精査されて、資料もふえ、農耕文化を背景にこれらの説話が中国大陸から日本に伝播してきたことを論じている。本書が生れるには、西南中国での調査旅行とその成果である『民話の旅から』が大きな意味を持っていたらと推測される。

3. 比較説話学の方法

本書で氏は「比較説話学」という名称を使っているが、その方法について12頁にわたる「序に代えて」で次のように論じている。

昔話伝説の発生・分布についての学説は、「1. その民族が持っていた神話や古い信仰から発生したとする継承論」「2. その骨子は空間を越えて移動し伝播したとする移動（伝播）論」「3. 人間のもつ共通する霊的・精神的才能から類似した昔話・伝説が発生したとする多元的発生論」が考えられるが、日本では柳田国男により唱導された「一国民俗学」の理念が強調されたために、「継承論」を中核に「発生・分布論」を包摂しながら論議されてきた。それについては関敬吾などによって、「移動論」の立場から反論されたりしたが、その資料の量的・質的存在に問題があった。移動論には「より近くの、より類似が求められなければ

ならない」わけで、著者は日本の説話研究には「隣接する東アジアの地域、ことに中国大陸や朝鮮半島での類話」が求められなくてはいけないとされる。それは昔話だけでなく伝説もそうで、今まで継承論で説かれてきたものも、類話が発見されたことにより、「本来、移動論で説くべき民間伝承」だったことがわかってきたものも多いという。

移動論は「移動の仕方が主要な課題」であるが、それは「人の移動と文献」が移動の主力であったといい、柳田国男の「無限定な説話の移動は考えられない」という主張に対しても、伝説でさえ「移植はそれほど困難なこととは考えられない」柳田が強調するほど、台木にこだわる必要のないケースが多い」と氏は本書での論考をふまえて断定される。「後世、あたかもその民俗・信仰自身から生まれたとするような解釈をされている説話」が、実は隣接地域にも多く分布しているといった例が増えているならば、移動論の立場から比較説話のための資料をもっと整備していかなくてはなるまい。

南方熊楠以来、比較説話学的研究がなされていなかったわけではない。柳田国男の「一国民俗学」のために継承論だけが喧伝されたわけでもなからう。「一国民俗学」の精緻な調査の積み重ねがあったことが、日本民俗学の成立になったのだと思う。だから隣接地域の説話の研究が、日本民俗学の昔話伝説の膨大な成果ほどの成果が得られていないから、比較説話学の成立が困難な状態にあったともいえるのではないか。その意味でも著者が本書のような成果を示されたことの意義は大きい。

4. 感想的注釈

近年、比較民俗学に関わるめざましい成果が出版されている。本書に関係するものでは、本年4月に後藤淑・広田律子両氏の編になる『中国少数民族の仮面劇』（木耳社）がある。その中に潘朝霖「イ族の仮面劇『撮泰吉』」という論文があり、これは本書の「大歳の客型伝説とツォタイジ儀礼」とあわせ読むとよい。1988年7・8月に伊藤氏が

団長として、貴州省威寧の彝族回族苗族自治県の板底郷を調査され、1989年の『季刊自然と文化』24号に発表されたわけだから、二書の間には深い。

「西南中国の火把節起源伝説」については、私も1982年8月の「中国民話の会」訪中の折に、大理白族の火把節を見学し、帰国後三河民俗談話会(31回例会「白族・火把節を訪ねて」)で報告したことがある。その際、火把節を虫送りの要素と、死者の霊の鎮魂の要素の二面性があるのではないかと述べたのだが、氏はこの論文で火把節の起源伝説を細かく分類して、祖霊祭祀的側面や怨魂化虫の性格をもつ火把節起源伝説に他の故事が複合して形成されたものと推測されている。

「継子の井戸掘り」の論考については、2つのコメントをしておきたい。

沖縄の「唐話」のうち「運定め」を引用した箇所、この話型は沖縄・本土・朝鮮半島にも広く分布する「運定め一夫婦の因縁」型であるという。この引用は「唐話」が他の民間説話が在来の伝承なのに対し、「沖縄への伝来の時期が比較的新しく、かつ、伝来の経緯が相対的に具体性をもっていた」ことを言うためのものではあろうが、これは唐代伝奇小説として有名な「定婚店」(李復言『続玄怪録』太平広記159)と同じ話型である。だから、二十四孝や歴史伝説と同じレベルで唐代伝奇小説から「唐話」へのルートと、簡単に処理することも可能なのである。

昔話「継子の井戸掘り」も、「海外から伝来して定着し、消化されて、わが国の風俗信仰など社会生活に機能し、そのためあたかもわが国の庶民生活の裡から発生したかのごときよそおいを呈した昔話や伝説が少なくないのではないか」という例として考察されているが、これももっと別の比較説話の視点の可能性もありそうだ。氏がこの論文を『歴史公論』(第11巻9号・昭和60年9月)に書かれた後、小島環禮氏が比較民俗学会第9回説話学会議(昭和63年11月13日帝塚山短期大学)において、「シッディクールのからみた日本の中世縁起文学の成立」と題して研究発表され、そこで次のような比較を試みられている。

それはシッディクールの第5話「龍神宥和」を昔話「お銀小銀」「神道集」「箱根本地」「曾我物語」「月日の本地」「舜子変文」「チベット昔話」等々と比較したもので、シッディクールを核として大陸から日本への説話の展開を考察された。そして「12世紀の本地物が大陸の語り物と密接な関係を持っていそうだ」「中国の継子話は日本へ一度だけでなく何度も来ている」といった指摘もされており、本書で「継子の井戸掘り」が「未消化のまま伝承」されているという指摘と共に、この話型の奥行を思わせて興味深い。

5. 比較説話学から比較民俗学へ

飯豊道男氏が「甘いおかゆ・塩吹き白」(『昔話一研究と資料』16号「昔話の比較」昭63)という昔話を論じ、「話は別に生活と民俗に根ざさなくてもよかった」と述べているように、昔話はもちろん伝説も、本質的には文学として成立・享受されているとみるべきものである。文学であれば「台木にこだわる」どころか、少々の話の増減・変容など意に介さずに語られることも多かろう。話だけのおもしろさでいくらでも移動できるのだ。

そうした昔話伝説を、伊藤氏はなお背景となった文化の中において見ようとする。比較説話学に止まろうとせず、さらに比較民俗学への道を追求しているようだ。「序にかえて」の最後でも「民間説話の領域では比較民俗学という複眼的研究方法をとるべき時期にすでにきている」と明言されている。また「日本国内に限定した民俗学的研究のみによってではなく、つねに隣接地域をも視野に入れた比較民俗学的なアプローチに俟たなければならない」(122頁)とか、「比較研究的視野があわせ求められなければならないであろう」(224頁)「より広範な比較研究も当然不可欠であるといわなければならない」(263頁)といい、最後の「結び」でさらに、「ひとり民間説話にとどまらず、他の民俗事象をも含む複合的な比較民俗学的アプローチが進められていけば、それによって、わが国民民族文化の新しい側面がひらけ、民族文化の特質が鮮明にされていくものと期待される」と

比較民俗学の必要性を明記している。

説話にしる民俗にしる表面的事象にばかり目を向けて似ているとか似ていないというのでは意味がなかろう。その点氏は民俗文化の背景をふまえて、昔話伝説という説話をとらえ、比較の土俵にのせようとされる。その試みは単純な事象の比較を越えて説得力も持つ。この方向が比較の方法を生み出していくであろうが、説話伝播の大陸からの波は1回や2回ではなかろうし、民俗文化の伝播も単一な現象ではなかろう。伝播の波をさぐるベースとなるものを、さらに追求していく必要があるように思われる。(第一書房 1991・5月)

鈴木満男著

『柳田・折口以後』

古家 信平[※]

1

本書は、著者がここ数年来発表してきた東アジア世界における民俗の思想のありかたに関する諸業績にかなり手を加え、書き下ろしを含めて構成したものである。

全体は7章からなり、その前半の4章では日本、韓国、中国の民俗および民俗研究を、中国文明の圧倒的な優越性を前提として検討する。そこでは日本や韓国の占める位相を《熟蕃性》と名づけ、中国以外の東アジア社会を熟蕃社会と呼ぶうとしている。熟蕃という言葉自体は台湾研究者にはなじみ深く、生蕃と対になって使われる用語で、漢人国家あるいは社会に組み込まれ、漢人の習慣を受け入れ地方官僚に服属する部族民は熟れており、漢人の文明を受け入れていないものは生まなのである。過去のかかなり長い期間にわたって漢人社会は膨張を繰り返し、周辺諸民族を同化してきたが、日本も韓国もその意味では中国文化に浸染された、つまり熟蕃の境遇にあり、それが基本的な文化環境であるとするのである。そして、漢人

※筑波大学歴史・人類学系講師

の膨張過程では周辺の種族文化を同化し、それぞれの固有の文化伝統を喪失させるのがほとんどで、その逆が希有であるのは、漢人の文明が個別的な種族文化ではなく、普遍的な文明の域に達していたからとしている。しかも、いったん漢化すると元には戻れなかった、つまりその変化は不可逆的であった。以上のことが、本書の前半部そして後半にも関連する作業の枠組みとなっている。

こうした熟蕃社会において、みずからの文化的な独自性に目覚めるとき、民俗学が注目されるとして、韓国、台湾の例が紹介されている(2章)。まず、朝鮮半島の人々は中国人以上に中原文明の忠実な継承者たらんとしてきたのだが、そこでの最近の動きはヤンパン文化を引きずりおろし、庶民層の文化、さらに賤民層の文化も拾いあげて「国民文化」としてとらえようとする動きであるとし、朝鮮半島の古来の宗教的伝統を踏まえ将来を見通させるものとして、新宗教の一つを検討し、すでにこれに関する論文を発表している。

一方、台湾では五・四運動と運動したような白話文運動が台湾総督府の圧迫によって成功せず、さらに、国民党政府も民俗学とその素材となる民俗に警戒を怠らなかつた。台湾民俗の独自性が明らかになると、中国大陸と台湾の正当な政権であるとする国民党の主張が、文化の次元から崩れることになるからであるが、同様の危惧を大陸の支配者も抱いている。しかし、民衆のレベルでは福建、広東などの出身にこだわらず、台湾を郷土とする感情を抱き始めている、つまり、文化の台湾化が進みつつあるという説を紹介する。しかしながら、台湾に民俗学が成立するには、理論的に非常に難しいとしている。

2

台湾には筆者も1982年以来、毎年足を運んでいるので、ここで著者が述べたことには同感する点が多々ある。少し長くなるが、関連する台湾の最近の状況を述べさせていただきたい。現象面だけ追いかけてみても、野党の働きかけなどによって、戒嚴令の解除(1987年7月)以来の台湾語の公共